

現代日本語における漢語接辞研究の概観

山下 喜代

一 はじめに

本稿は、明治以降の漢語接辞研究の歴史を振り返り、展望することを目的とする。管見では、日本語における漢語接辞の研究史を概観した先行文献は見当たらない。本稿は、その研究史概観のための研究ノートとも言うべき性質のものである。

ここで言う「漢語接辞」とは、一般的に漢字で表記される字音接辞のことで、二字漢語に前接または後接して三字漢語を構成する形態素を指す。「新体操・前校長・近代化・合理的」における傍線部であり、「新・前」等が接頭辞、「化・的」等が接尾辞である。またこれらは、漢語のみならず和語、外来語、混種語にも接続して合成語を形成する。語の構成要素である形態素の内、これらを「語基」と捉え、「接辞」とすることには異論もあるが、本稿では、「接辞」と呼ぶことにする。なお、取り上げる文献で「接頭語・接尾語」を使用している場合は、そ

の術語に従うこととする。

ところで、「漢語接辞」という概念はいつ生まれたのだろうか。阪倉（一九七三）によると、「幕末から明治期にかけて、洋学の『文典』のかたちで日本にはいつてきた西洋流の品詞分類は、まもなく江戸時代以来の単語分類のながれをおさえて、あたらしい品詞分類の潮流となった」という。またその中で、大槻文彦が『言海』の巻頭に掲載した「語法指南」（一八八二）で示した八品詞が、日本語の文法研究のなかに安定し、現代まで品詞のたてかたにおける基準となっていることは周知のとおりと述べている。この「語法指南」では、八品詞以外に、接頭語（Prefix）と接尾語（Suffix）が示されている。その中で、和語に加えて、漢語については、以下のように記述されている。

漢語ノ「不義」「不本意」「無位」「無慈悲」第一「第二」當年「當代」「數人」「數年」「諸事」「諸書」「衆人」「衆僧」「ナドモ、接頭語ナリ

そして、接尾語の例としては「輩・等・箇・號・番・匹・枚・帖・束・段・通」が挙げられている。接頭語では、二字漢語の構成要素として用いられているものが多いこと、そして接尾語では、いわゆる助数詞に類するものが多いことは、「新発明・高性能・近代化・合理的」等の三字漢語の多用化が起こる以前の状況を反映していると思われる。このように、特に漢語を取り上げて示している点は注目される。「語法指南」では、接辞 (affix) という語は用いられていないが、日本語の品詞分類において、初めて「漢語接辞」という語種にも注目した言語単位を明確に示した点は、特筆に値するだろう。「語法指南」は、文法書であり、そこで述べられているのは、品詞論である。品詞論の中で、初めて漢語接辞が言語単位として認知されるようになったと言えよう。

本稿では、「語法指南」の品詞論の中で初めて言語単位として明確に示された「漢語接辞」が、その後の日本語研究の中でどのように研究対象として扱われ、どのようなことが問題とされてきたかを概観し、特に影響を与えたと思われる主な研究を取り上げ、漢語接辞の大きな研究の流れを示すこととしたい。

二 文法論における漢語接辞

阪倉（一九六六）では、日本の文法論では、品詞論なるものが、文法論における第一義的な部門と考えられ、文論は、むしろ二の次にされてきた結果、文論的立場から品詞論をながめる

ことによって当然起こってくるはずの、語の意味的な結合や機能の問題、また「語」という単位に関する根本的反省、などが欠如しているところに、従来の語構成に関する考察が深まらない一つの原因があると述べている。また、語構成に関する種々雑多な問題が、諸処に分散して説かれていて、語構成論として一つのまとまりは求めにくく、文法論全体のなかでいかなる位置を占めるかは、明確でないものが大部分であったとしている。そのような中で、全体の体系との関連が考慮されていると認められるものとして、山田孝雄と松下大三郎の著書が挙げられている。以下では、両者の文法研究書で漢語接辞がどのように記述されているか述べることにする。

山田孝雄の『日本文法学概論』では、第二十六章が接辞の章となっている。その定義としては、「接辞は単語の内部に於ける遊離する性質を有する部分にして既に成立せる単語又は語幹に附属して複雑なる意義を有する単語を構成するものなり」とある。そして、接頭辞は二種類あるとし、一つは音調を添えるもの、もう一つは一定の意義を示すものと述べている。その中で、意義を示す漢語（字音のもの）として、「御・不・無・第」が挙げられている。また、接尾辞については、意義を添えるものと、一定の資格を与えるものの二種があるとしている。意義を添える漢語の接尾辞として「君・番・等・號」が挙げられており、数量を示す多くの接尾辞があることが示され、その例として「人・羽・匹・冊・本・枚・束・輪・臺」が挙げられている。また、

資格を与えるもの、すなわち結合する語を名詞、動詞、形容詞、副詞などに変える接尾辞として挙がっているものは、ほとんどが和語で、漢語と言えるのは「氣(げ)」のみである。

松下大三郎の『改撰標準日本文法』は、言語の三段階として「原辞・詞・断句」を定めた。その中で、いわゆる「形態素」に当たる「原辞」については次のように述べている。

原辞は詞の材料であつて説語構成上に於ける言語の最低階級に在る。例へば「鉛筆」は詞であるが、その「えん」と「ひつ」とは原辞である。又助辞の如きものも原辞である。原辞に完辞、不完辞の別が有る。不完辞とは他の原辞と結合して始めて一詞になるもので単独では一詞を成さない原辞である。例えば漢字の音や助辞の類はそうだ。

そして、不完辞を助辞と不熟辞(字音)に二分し、さらに不熟辞の中で「松・春・往・来」などのように実質的意義を表す実質不熟辞と、「不・未・可・非」などのように形式的意義を表す形式不熟辞に分けている。不熟辞の中には接辞化した場合の有るものもあるとし、「不心得・無考え・旧取締役・新年寄」の「不・無・旧・新」などは接頭辞化したもので、「ヴォルト計・メートル法・小売商・浜名湖」の「計・法・商・湖」などは接尾辞化したものであると述べている。松下の字音接辞は現代の漢語接辞の捉え方に重なるものと言える。

その後、文法研究(統語論)の中で、語構成要素(形態素)を体系的に捉え、論じたものとして森岡健二の「日本文法体系

論」が挙げられる。森岡(一九九四)は、形態論は語の構造を記述する部門であるとし、統語論の基礎部門と位置づけ、形態素について論じている。複合語の構成要素である形態素を「語基・派生辞・屈折辞」の三種に分類する。いわゆる接辞は派生辞に含まれるのであるが、漢語系は「御」を唯一の接辞としている。そして、熟語の構成要素でありながら、その意味・用法が接辞に類するものを「準接辞」と呼んで、純粹の接辞から区別している。「亜熱帯・過保護・急斜面」「運転手・近代的・建築材」など、二字熟語が基になって、語頭または語尾に漢字形態素を添えるもので、このような位置にある形態を準接頭辞あるいは準接尾辞と呼んでいる。

三 語彙論・意味論における漢語接辞

文法論の中で、語構成が論じられるという研究の流れから、独立した語構成論へと進展するには、語彙論研究の発達を待たねばならなかった。その点について、阪倉(一九六六)は、国立国語研究所が五十年代から始めた雑誌を対象とした大規模語彙調査が、その後の語構成論の新たな展開をもたらすことを予言している。その成果の一つとして挙げられるのが、斎賀秀夫の「語構成の特質」である。これについては、後述する。

五十年代以降の研究に言及する前に、漢語研究として特筆すべき山田孝雄の『国語の中に於ける漢語の研究』を取り上げることにする。序において「漢語が国語の内にありて如何なる量

を占め、如何なる地位と性質とを以て取扱はれてあるかの実状を報告せむとするにあり」述べ、第五章「漢語の形態の觀察」の「二 組織上よりの觀察」においては、語の構成に注目した分析が見られる。そこでは、一字の漢語、二字の漢語、三字の漢語、四字以上の漢語に分けて觀察している。その中で三字の漢語の觀察において、「その三字を二分して、下に質をあらはす語を置きて、上にそれを限定して意を明らかにしたるもの」の例として「未亡人・哲学者・研究生・行政官・絶交書・案内状・出版物」など、また、「下二字が、質をあらはし、上一字がそれを限定するもの」として「美少年・古戦場・老博士・賢夫人・大学者」など、多数の漢語接辞を含む合成語が挙げられている。ここでは、語の構成とともに、修飾部分と被修飾部分という構成要素の意味的關係にも注目した記述が見られる。

漢語については、山田（一九四〇）ですでに構成要素の意味的關係の記述が見られるが、合成語全体について、語構成を論じたものとしてまず挙げられるのが、齋賀（一九五七）である。これは、総合雑誌に出現した、複合、派生、省略等の方法によって形成された語について、その各構成要素間の結合關係を中心に語構成の特質を明らかにした論考である。分析の視点として以下の三点が挙げられている。

（一）語の結合力―現代の日本語では複合・派生等の語結合が実際にどのくらいの勢力で用いられているのか。またどのような種類の語が他の語と結合しやすく、どのような

語が結合しにくいのか。

（二）語結合の形式―どのような語が、他のどのような語と結合するのか、また、その排列の順序はどうか。

（三）語結合の意味的關係―たがいに結合する両要素間の意味的關係はどうか。

本論考では、「語の認め方」として「 β 」単位を採用している。いわゆる漢語接辞は、「 2β 」である。論考では「二字の漢語」として、分析がなされている。まず、「語の結合力」としては、単独で用いられることは極めて少なく、結合の要素として、接頭的、あるいは接尾的に用いられるとしている。一字漢語の「結合形式」としては、非常に偏りがあると述べ、五つの特長を挙げて、現代日本語のきわめて重要な語構成要素としての役割を果たしていると述べている。「語結合の意味的關係」については、以下の六種類に分けて論じている。

- (1) 並立關係 (2) 主述關係 (3) 補足關係
- (4) 修飾關係 (5) 補助關係 (6) 客體關係

一字の漢語については、特に「修飾關係」と「補助關係」で取り上げられている。修飾關係においては、「悪感情・好都合・新政府」等、前部分が後部分の性質、性格、状態等を限定するものが最も多いとしている。そして、この關係は、「文論において形容詞・形容動詞が体言を修飾するしかたと同様の關係である」と述べている。次に多いのが「未発育・無責任・非公式・御好意・第三者」等の形式的意義を添えるもので、普通に

接頭語と呼ばれるものであり、かなり自由に他の語に接する可能性を持つ点で、「ま・人間・き一本・ど・まんなか」等の和語の接頭語とは異なる点としている。また、「同学院・約八年・各家庭・某新聞」等の修飾関係は、下の要素への結合の度合が、前二者に比べてゆるく、「文論における連体詞の修飾のしかたと相似た点があるので、結合形を一つの複合語と認めるかどうかは、かなり問題となるところであらう」と述べている。

「補助関係」は、後部分が前部分を形式的に補助する関係にあるもので、最も多く現れるのは「従業員・近代化・専門家・帰国後」等の一字の漢語であるとしている。そして、このような一字の漢語は、種類はさほど多くないが広範囲の語に自由につくので、その使用度が非常に高いと述べている。また、「的・式・風」などは、その結合形全体を形容動詞の語幹に、また、「化・視」は、その結合形をサ変動詞の語幹にするというふうに、前部分になる名詞の語性を変えてしまうという点が特に注意されると指摘している。斎賀の論考によって、語構成論の中で初めて漢語接辞の特質が論じられたと言えるであろう。

このように、語構成要素としての漢語接辞研究の歩みは、現代日本語の語構成研究の歩みの中で捉えることができる。日本語の語構成研究の歩みについては、斎藤・石井（一九九七）が参考になる。巻末の日本語語構成研究文献一覧は、一九三五年以降に発表された文献一覧であるが、漢語接辞に関する文献は、「的」「不」といった個別の接辞を取り上げた研究が、五十年代

以降少しずつ出てくる。しかし、この頃の語構成研究の中心は、和語を対象としたものであり、包括的な漢語接辞の研究は、七十年代になってからと言える。その嚆矢と言うべきものが野村雅昭の一連の漢語研究であろう。野村の研究については、後述する。七十年代以降、否定の接頭辞「不・無・未・非」を始め「新・反・再」等、また接尾辞は「的・性・式・風・者・家・質・料・代・上・中・度・力・系・化」等についての論考があるが、研究対象は比較的限制されているようである。

漢語接辞に関わる研究には、野村（一九七二）（一九七三）（一九七四）（一九七八）（一九八一）などの一連の研究がある。野村（一九七三）は、否定の接頭語「無・不・未・非」について、新聞と雑誌に出現した用例を分析することによって、その用法について論じている。内容は、否定の接頭語がどのような意味の性格を持った語と結合するか、また、結合したことによって、結合形全体がどのような意味を表すかという点を検討したものである。また、それぞれの接頭語の用法・機能の違いを考察し、「無・不・未」については、結合対象となる語がどのような性格の語であっても、否定の意味を添えると同時に、事態や様態を表す、属性的概念をさす名詞を作る点に共通性を持っているとしている。それに対して、「非」は、もともと実態概念を表す語と結合しやすく、結合対象語に、単に否定の意味を添えるだけで、属性概念を付与するはたらきはないと分析の結果を述べている。本論考は、現代日本語における漢語の否定接尾辞（接

尾語)の用法・機能を明らかにした初の語構成論と言えよう。

野村(一九七八)では、すでに存在する和語・外来語の語基および、字音複合語基、そして、それらの結合形に、前部分あるいは後部分から結合する、字音形態素のことを「接辞性字音語基」と呼んでいる。新聞を資料として、そこに出現した字音語基について、調査と分析を行っている。その中で、接辞的用法を持つ字音語基として、前部分になるもの二五〇、後部分になるもの六〇五を抽出し、それを分類し、用法と機能について考察を進めている。いわゆる漢語接辞について、その種類を明らかにし、包括的な分類、分析を行った嚆矢となる論考である。野村(一九七八)における成果は、まず第一に、新聞において、どのような漢語接辞の使用度数が高いのかを示したことが挙げられる。第二は、漢語の接頭辞と接尾辞をその品詞性や意味によつて以下のように分類し、具体例を示したことである。

〈前部分の接辞性字音語基の分類〉

- ① 体言型：党大会・核爆発・都知事・脳細胞・県議会・女生徒
- ② 連体修飾型：大都市・高気圧・古美術・軽金属・名選手
- ③ 連用修飾型：再検討・最年少・既発表
- ④ 連体詞型：同議員・前会長・今国会・来シーズン・全日本
- ⑤ 用言型：反政府・超党派・対共産圏・有意義・過保護
- ⑥ 否定辞型：無意識・不明朗・未発表・非協力的
- ⑦ 数量限定型：第〇日・約〇分・満〇歳

⑧ 敬意添加型：御婚礼・令夫人

〈後部分の接辞性字音語基の分類〉

- ① 体言型：〈時〉決算期・着陸時・豊漁年〈場所〉震源地・交差点・住宅街〈組織・集団〉先進国・保育園・競技場〈人間〉日本人・会社員・観光客〈事象〉関心事・就職難・伝染病〈活動〉芸術祭・時代劇・建築費〈精神・抽象〉人類愛・知識欲・治療法〈物〉食料品・競走馬・包装紙〈範疇・分野〉文科系・学校群・軍事面〈位置・順序〉地球上・時間外・国際間〈数量・程度〉生徒数・平均値・信頼度〈助数詞〉個・件・年
- ② 用言型：近海産・外国製・大学卒・収入減・絶望視・活発化
- ③ 相言型：積極的・柔軟性・シャンソン風・文語調・自動式

第三は、接頭辞「不・無・未」、接尾辞「性・化・的」などを挙げ、これらに合成語全体の品詞性決定機能があることを明確に記述したことが挙げられる。

野村の研究以降、個別の漢語接辞を取り上げた論考が少しずつ増加することになる。また大きな潮流として形態論的研究から、語彙論研究の中の語構成論として、漢語接辞の意味・用法を捉えようとする論考が中心となっていく。さらに統語論的、あるいは意味論的な視点で漢語接辞の性質を考察しようという研究が中心となっているのが現在の状況であろう。そのような研究の展開のなかで、特筆すべきは生成文法の理論に基づく研

究である。

四 生成文法における漢語接辞の研究

生成文法理論に基づく漢語接辞の研究としては、影山太郎の研究が第一に挙げられよう。さまざまな論考で、漢語接辞について言及がある。影山(二〇一〇)では、「漢語が日本語形態論にもたらした最大の質的变化は、語というカテゴリーであり、日本語は、この抽象的なカテゴリーをベースにして、世界的にも珍しい統語的複合語および動作主複合語を創出したと言えるだろう」と述べている。まず、この「+語」という言語単位について取り上げたい。影山(一九九三)では、「現―、前―、各―」などの連体詞的接頭辞を含む「現会長・前学長・各部局」などを「通常の語の単位より大きいが、あくまで語であって句ではないという単位」として「+語」と名付けている。+語の特徴は、接頭辞の直後に短い休止を伴うことで、音声的には句に近い。そして、接頭辞は漢語に限られ、和語には見られないとしている。言語単位として、語と句の間に+語を設定し、その構成要素が漢語接頭辞であることを示した点は、特異と言える。次に、語彙意味論の基本概念である「クオリア構造(特質構造)」と「語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)」の考えを用いた論考を取り上げる。

「クオリア構造(特質構造)」とは、基本的にはモノの性質を表すもので次の四つの要素からなるとされている。

1 構成役割…材料、材質、成分、重さ、内容、(の一部などの内的な性質。

2 形式役割…具象物か抽象物か、自然物か人工物か、性別、形状、色、大きさなどの外的な属性。

3 目的役割…対象物が本来的に意図された目的や機能

4 主体役割…それを産み出す動作や原因、成り立ち、出処

例えば、影山(二〇〇七)では、「ホテル」という名詞のクオリア構造が次のように示されている。

形式役割⇐個物、人工物(x)

構成役割⇐客室、ロビー、フロント、レストラン…

目的役割⇐客(w)をxに宿泊させて、もてなす。

主体役割⇐yが設計し、zが建築する。

→ 安藤忠雄氏が設計

また、影山(一九九九)では、漢語接辞について特質構造からその意味を分析した例が示されている。例えば、動作主を表す接尾辞「―家」と「―者」について、それらを含む合成語の特質構造は以下のように示されている。

N―家

形式役割⇐人間(x)

目的役割⇐Nに従事する

V―者

形式役割Ⅱ人間 (x)

主体役割ⅡV (動詞要素) の語彙概念構造

「一家」は、「主として名詞に付いて、その名詞が表す活動に専門的あるいは恒常的に従事している人を指す場合がほとんどである」と述べている。一方で「一者」は、「希望者・欠席者・入学者」など、動詞的な意味合いの要素に付くことが多いとしている。そして、前者の職業名のような個体に固有の永続的な性質を述べることを「個体解釈 (Individual-level)」後者の「それを行った／被った人」といった一時点での状態を述べることを「事態解釈 (stage-level)」と区別している。すなわち、「一家」と「一者」を、個体解釈の名詞と事態解釈の名詞の違いと捉え、特質構造でその違いを示している。また接頭辞についても、特質構造を積極的に利用する価値があるとして、「新」を例に述べている。

影山 (二〇〇七) は、漢語接尾辞「一化」のクオリア構造と属性叙述機能を英語の接尾辞 *-ize* と比較することによって論じたものである。属性叙述は、時間の流れを超越した固定的な状態を表すもので、主語や主題となる名詞の恒常的な性質を示すものとされている。影山 (二〇〇七) では、「X化」という形態は、修飾 (叙述) する名詞の内在的な属性がXに変化することを意味し、その際、内在的な属性というのは「被修飾名詞のクオリア構造における形式役割、構成役割、あるいは目的

役割に記載された何らかの要素を指す」と規定されるとしている。そして、「主語が／をX化する」というのは、その主語名詞が持つ何らかのクオリア構造の形式役割、構成役割、あるいは目的役割に記載された要素をXに書き換えるということである。そのことから、漢語接尾辞「一化」には、属性叙述機能がある述べている。属性叙述は統語論に関係する概念であり、影山の論者は漢語接尾辞の研究を統語論と語彙意味論を融合させ発展させたものと言える。

次に「語彙概念構造」を用いた研究を取り上げる。影山 (一九九九) によると、語彙概念構造は、一九七〇年代の生成意味論に端を発し、その後、発展した意味理論で、動詞の概念的意味を明確に表示し、統語構造と意味構造との関係を明確化しようとするものという。つまり、語が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造式のことである。その示し方は研究者によっても異なる。また、どのようなタイプの意味構造を想定するかも様々である。ここでは、影山 (一九九九) で動詞の語彙概念構造の基本形とされているものを提示する。

語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure: LCS) の基本形

- a 状態 (state) (アル型) [[j y BE AT-] z]
- b 動き (ナル型)
 - 1. 変化 (change) [BECOME[[j y BE AT-] z]]
 - 2. 移動 (motion) [[j y MOVE[PATH]z]

- c 活動 (activity) (スル型) [[x ACT ON- [y]]]
 d 使役 (causation)

[[x CAUSE [BECOME [[y BE AT- [z]]]]]]

語彙概念構造は一種の論理式で、「BECOME・BE・AT」などの意味述語と、「[]」で示された「項」で成り立つ。影山(一九九九)では、意味述語について次のよう説明されている。

意味述語

BE: 静止した「状態」を表す。

AT: BEと「一緒に用いられて、抽象的状态ないし物理的位置を示す。

BECOME: 「変化」を表す。 MOVE: 「移動」を表す。

ACT: 継続的あるいは一時的な「活動」を表す。

ON: ACTと「一緒に用いられると、働きかけの対象を示す。

また、状態動詞の語彙概念構造の基本形は以下のように示され、次のように説明されている。

[[y BE AT- []]]

BEの前の空欄(y)が「主語(何が、誰が)」に当たり、ATの後ろの空欄(z)が「どこ、どのような状態」に当たる。これらの空欄は変項と呼ばれ、実際の文では具体的な名詞に対応する。

この語彙概念構造の理論を用いた漢語接辞の研究として、小

林(二〇〇四)の接尾辞「化」についての論考を挙げる。ここでは、接尾辞「化」の語彙概念構造を次のように示している。

…[BECOME [y BE AT□□]]…

そして、次のように説明されている。

「化」による派生は、基本的には、非主要部の表す概念がATの目的語の位置に定項として代入される操作である。

・黒澤監督の遺稿が映画化された。

・「映画化」の語彙概念構造…[BECOME [y BE AT映画]]

…

y: 黒澤監督の遺稿

このような語彙概念構造の理論を用いた研究は、語構成研究に新たな視点を加えるもので、その点では、今後の発展が期待されるものである。しかし、元来、語彙概念構造は語が有する意味を網羅的に示すものではなく、そのスキーマを構造として示すものであるため、多様な意味・用法を記述するには、必ずしも有効とは言えないだろう。小林(二〇〇四)では、統語論的視点から「化」の合成語を多角的に考察しているが、実際のところ、その記述は用例に基づく分析が中心であり、論考の冒頭で示されている「化」の語彙概念構造と、その後展開される分析との関係は必ずしも有機的とは思われない。

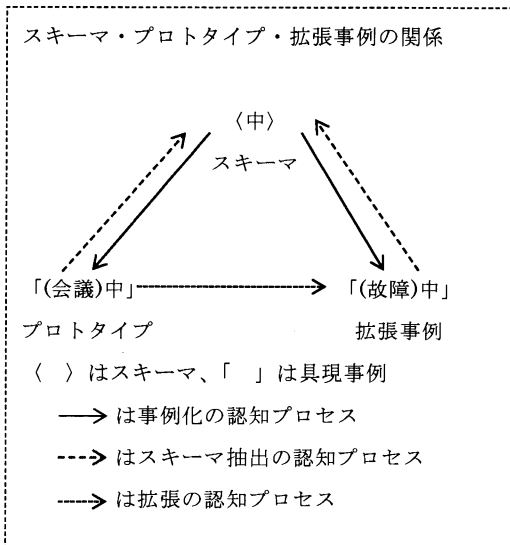
次に、生成文法理論に基づく漢語接辞の研究として、杉岡(二〇〇九)を挙げる。ここでは、時間を表す接尾辞「一中」の多義性について論じている。接尾辞「一中」について、時間名詞を作る場合、アスペクト表現を作る場合、アスペクトと属

性叙述の關係に分けて、統語論的視点から考察しその多義性を明らかにしている。漢語接辞研究の統語論への広がりを示す研究として注目される。

五 認知言語学における漢語接辞の研究

認知言語学の理論に基づく漢語接辞の研究は、まだ緒に就いた段階と言えよう。多義語の複数の意味を統括するモデルとし

図 1



てラネカー (Langacker) のネットワーク・モデルがある。ネットワーク・モデルはプロトタイプとスキーマ及び拡張によって多義語の意味の相關關係を示したものである。吉村(二〇〇三)では、漢語接尾辞「一中」を例にして、認知プロセスにおけるスキーマとプロトタイプ、拡張事例の關係を図1のように示している。ここでは、接尾辞「一中」がスキーマと捉えられており、その典型的具体例すなわちプロトタイプが「会議中・食事中」であり、拡張事例が「故障中・停止中」などとされている。この關係は、「一中」の意味のネットワーク・モデルを示したものと捉えられる。この場合、スキーマは「〜しているところ」「〜が進行している」「すなわち」「進行」ということになる。スキーマからの事例化としてプロトタイプ「会議中・食事中」と拡張事例「故障中・停止中」が具現化し、プロトタイプからの拡張で「結果の存続」の意味が派生し、その具現化が「故障中・停止中」であると言える。山下(二〇一一)は、漢語接尾辞「式・風・的」を対象に意味ネットワーク・モデルの記述を試みた論考である。これらの接尾辞の多義性を明らかにし、それぞれのネットワーク・モデルを示して、類義關係にある接尾辞の違いについて述べている。

中島(二〇一〇)は、漢語接尾辞「度・系・力」を対象に、ブログなどの電子メディアに出現する漢語接辞を含む新語や臨時的な語、句などを「新造語」と呼び、考察している。特に認知言語学を標榜しているわけではないが、考察には認知言語学

的な視点が多用されている。例えば、新造語における「系」の用法として四つ挙げているが、以下のように述べている。

「系」は、新しいカテゴリーの名付け、典型的なカテゴリー成員の焦点化、認識的モダリティ表現としての解釈による周辺の構成員の焦点化、さらに語用論的レベルでのあいまい化表現へと意味機能の拡張が見られる。とりわけ、表現をあいまい化する語用論的效果は「系」を使う強い動機となっている。

中島の論考は、語用論的な立場からの考察もあり、漢語接辞の新たな研究の広がりを示すものと言える。

六 おわりに

本稿では、現代日本語における漢語接辞について、大槻文彦が「語法指南」で「漢語接辞」の概念を日本語に取り入れた後、文法論、特に品詞論の中で、名詞、動詞などのいわゆる品詞以外の言語単位として取り上げられるという研究の状況を見た。その後、派生語を形成する語構成要素として、語構成論の中で、さらには、語彙論、意味論、統語論の立場から多角的に論じられるように発展してきた研究状況を概観し、いくつかの先行研究を取り上げ、そこで、どのような視点での研究がなされているかを示した。しかし、対照言語学の立場から、英語の接辞と日本語の漢語接辞の研究や、日中の漢語接辞の研究も少なからずあるが、それらの論考にはほとんど言及できなかった。今後

の課題としたい。

注

1 ここでの「複合語」は、語基同士の結合からなるいわゆる「複合語」のことではなく、語基と接辞が結合して形成される派生語も含めた、合成語のことである。

2 β 単位は、現代語として意味を担っている最小の言語単位をいう。漢語の場合は、原則として漢字一字で表わされる部分を β 単位とする。

引用文献

- 大槻文彦（一八八二）『語法指南』『言海』六合館
影山太郎（一九九三）『文法と語形成』ひつじ書房
影山太郎（一九九九）『形態論と意味』くろしお出版
影山太郎（二〇〇七）『接尾辞「一化」、-ize、-ityの属性叙述機能』『人文論究57』2 関西学院大学
影山太郎（二〇一〇）『日本語形態論における漢語の特異性』『漢語の言語学』くろしお出版
小林英樹（二〇〇四）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
斎賀秀夫（一九五七）『語構成の特質』『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』筑摩書房
斎藤倫明・石井正彦（一九九七）『語構成』ひつじ書房

阪倉篤義（一九六六）『語構成の研究』角川書店

杉岡洋子（二〇〇九）「一中」の多義性—時間をあらわす接辞をめぐる考察—『語彙の意味と文法』くろしお出版

中島晶子（二〇一〇）『新造語における「度」「系」「力」の用法』

『漢語の言語学』くろしお出版

野村雅昭（一九七二）『複次結合語の構造』『国語研報告49電子計算機による国語研究Ⅴ』秀英出版

野村雅昭（一九七三）『否定の接頭語「無・不・未・非」の用法』

『国立国語研究所論集ことばの研究4』

野村雅昭（一九七四）『三字漢語の構造』『国語研報告51電子計算機による国語研究Ⅵ』秀英出版

野村雅昭（一九七八）『接辞性字音語基の性格』『国語研報告61電子計算機による国語研究Ⅷ』秀英出版

野村雅昭（一九八二）『近代日本語と字音接辞の造語力』『文学』49巻10号

松下大三郎（一九三〇）『改撰標準日本文法』勉誠社

森岡健二（一九九四）『日本文法体系論』明治書院

山下喜代（二〇一一）『字音接尾辞「式・風・的」の意味—プロタイプとスキーマ—』『青山語文41号』青山学院大学日本文学会

山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』宝文館

山田孝雄（一九四〇）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館

吉村公宏（二〇〇三）『認知語彙論』『認知音韻・形態論』大修

（やました・きよ／本学教授）